



〈接触〉が 阻まれた世界

〈リモート〉と〈接触〉の社会倫理

〔司会兼討論者〕
森山花鈴

(南山大学社会倫理研究所第一種研究員/
法学部准教授:政治学・政策過程研究・自殺対策研究)

主催:南山大学社会倫理研究所
共催:上智大学生命倫理研究所

コロナ禍により、我々は人との接触の機会を多く奪われることとなった。人と会うことができないならば、死別などの別れもあまいまま訪れる。面会制限によって入院中の家族にも会う機会が減り、葬儀への参列も限られた人のみとなり、遺族でさえ故人と会えない場合もある。〈接触〉できないことは、我々の「別れ」にどのような影響を生み出しているのだろうか。

他方、大学では、コロナ禍におけるオンライン授業が話題となった。〈リモート〉での授業は非常時の緊急避難的なものと位置づけられ、新型コロナウイルスの感染状況が予断を許さないなかでも、対面授業への移行を可能限り求める声も少なくなかった。だが、本当に〈リモート〉で〈接触〉を代替することはできないのだろうか。また、〈リモート〉そのものの平時における有効性はないのだろうか。

なお、このコロナ禍において、南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所はともに研究所として〈リモート〉での発信が前提となった。研究やその成果の発信において、〈リモート〉と〈接触〉はそれぞれどのような意味を持ち、どのように活用されるのが望ましいのだろうか。

本シンポジウムでは、これらの問いを基軸に、コロナ禍を通して生まれた〈リモート〉と〈接触〉の社会倫理について議論するとともに、ウィズコロナとポストコロナ時代の〈リモート〉と〈接触〉、もしくはその両面を含めた〈ハイブリッド〉の在り方について、参加者諸氏とともに模索したい。

日時

2022年 6月25日(土)
14:00-17:30 (13:30以降接続可能)

開催形式

オンライン Zoomウェビナー
(ホスト:南山大学社会倫理研究所)



第一報告

「コロナ時代における喪失とグリーフケア」

川島大輔

(中京大学心理学部教授:
生涯発達心理学・死生学・自殺予防学)

第二報告

「学生生活の視点から〈リモート〉と〈接触〉を考える」

豊島明子

(南山大学社会倫理研究所第二種研究員/
法務研究科教授:行政法学・社会保障行政)

第三報告

「人間が身体であるということ:
西洋哲学史の観点から考える」

吉田修馬

(上智大学生命倫理研究所特任准教授:
倫理学・社会哲学・応用倫理学)

かわしま だい すけ
川島大輔 Daisuke Kawashima

第1報告

「コロナ時代における喪失とグリーフケア」

新型コロナウイルスのパンデミックによって私たちは実に多くのものを失った。身近な人を看取り、弔う形も大きく変化した。この時代において喪失とどのように向き合い、グリーフを経験すれば良いのかを考える。

プロフィール

《略 歴》 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学、京都大学)。独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター研究員、北海道教育大学准教授、中京大学心理学部准教授などを経て、現在、中京大学心理学部教授。

《専門領域》 生涯発達心理学・死生学・自殺予防学

《主要著作》 『生涯発達における死の意味づけと宗教』(2011年、ナカニシヤ出版)、『自死で大切な人を失ったあなたへのナラティブ・ワークブック』(2014年、新曜社)、『はじめての死生心理学』(編著、2016年、新曜社)など。

とよしま あき こ
豊島明子 Akiko Toyoshima

第2報告

「学生生活の視点から〈リモート〉と〈接触〉を考える」

コロナ禍の中で大学に急速に普及した、オンラインによる諸活動。私たちは、その利便性や可能性を実感した一方で、対面によるコミュニケーションの場を取り戻す努力も続けている。〈リモート〉と〈接触〉の間で見てきたものは何か、そして、私たちはどのようなゴールを目指すのか。学生生活の視点から考える。

プロフィール

《略 歴》 名古屋大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。名古屋大学法学部助手、三重大学人文学部講師、助教授、南山大学総合政策学部准教授、同大学大学院法務研究科准教授を経て、2012年より同研究科教授。

《専門領域》 行政法学・社会保障行政

《主要著作》 「福祉における公私関係の考察—情報提供・援助・苦情解決を素材に—」紙野健二・白藤博行・本多滝夫編『行政法の原理と展開 室井力先生追悼論文集』(法律文化社、2012年) 314-339頁、「生活保護基準と行政裁量」社会保障法33号(2018年) 43-57頁。

よし だ しゅう ま
吉田修馬 Shuma Yoshida

第3報告

「人間が身体であるということ： 西洋哲学史の観点から考える」

新型感染症の流行は、一方で私たちが身体であるということ、改めて思い出させている。他方で、リモートのコミュニケーションの普及は、一見すると、身体的な制約からの解放を進めている。身体を制約だとみなし、身体からの解放を求める考え方は、西洋哲学史上にもしばしば登場し、そして批判されてきた。いくつかの代表的な議論を取り上げて改めて検討を試みたい。

プロフィール

《略 歴》 慶應義塾大学文学研究科哲学・倫理学専攻後期博士課程単位取得退学、東京大学医学系研究科常勤特任研究員を経て、2019年より上智大学特任准教授。

《専門領域》 倫理学・社会哲学・応用倫理学

《主要著作》 「異種移植と人間の自然の技術化」、日本生命倫理学会『生命倫理』通巻30号、2019年、61-68頁。「優劣でなく平等に基づく順序づけのために：ワクチン接種の優先順位をめぐる倫理的課題」、『現代思想』青土社、2020年11月号(第48巻第16号)、60-67頁。「ルソーの平等論」、『平等の哲学入門』社会評論社、2021年、53-70頁。

「接触」が
阻まれた世界
〈リモート〉と〈接触〉の社会倫理

講演概要&
講演者プロフィール